

## 書評

*Realism and Naturalism in Nineteenth-Century American Literature.*

By Donald Pizer. Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois University Press, 1966.

## 岩山太次郎

本書の著者 Donald Pizer の考えによれば、1870年代、80年代のアメリカの現実主義小説家たちや1890年代の自然主義小説家たちは、それぞれの作品で、それぞれの時代が過去と現在を通して人間に課している限界を広げようとしている姿を写しだしている。そして、それらの小説家たちは、人間を意義と価値ある存在としてドラマ化しようとしているのである。小説家のこのような態度は、ルネサンス以降西欧の文学に様々な形式でみられるものであり、アメリカの1870年代、80年代、90年代の小説家もこの例外ではなく、彼らは現実と希望の間の「緊張」を保持しようとしているのである。（本書の表題は「19世紀アメリカ文学における……」となっているが、本書の扱っているのは1870年代、80年代、90年代のアメリカ文学、それも小説と批評に限定されている。）

序文において明らかにしているように、著者は本書で二つの問題に解答を与えようとしている。一つは、19世紀アメリカ小説にみられる現実主義と自然主義とはどんなものであるか、それらを最もよく説明するにはどうすればよいかという問題である。第二は、その時代の文学批評が現実主義と自然主義の出現やその本質に一体どのような関係を持っているかという問題である。

著者 Pizer はこれら二つの問題にたいして、三つの方法で答えようとしている。第一は、19世紀後期のアメリカの現実主義や自然主義がどのようなものであるかを直接論じようとする方法であり、第二は、その時代全般を対象としないで、19世紀後期の小説と批評の根底にある傾向をさぐりあてようとする態度であり、第三は、特定の文学運動とか文学形式をとりあげ論ずるのではなく、特定の小説や文学批評書をとりあげて分析する態度である。

著者はまず、現実主義と自然主義の定義づけと文学批評とは何であるかということから本書をはじめてい

る。現実主義文学にたいする従来からの考えを拡大し、主観的要素と倫理的観念主義の要素とをそれに加えている。そして、定義づけられた19世紀後期のアメリカ小説にみられる現実主義の特長を最もよく表わしている有名な三小説をとりあげ論じている。すなわち、William Dean Howells の *The Rise of Silas Lapham*, Mark Twain の *Adventures of Huckleberry Finn* と Henry James の *What Maisie Knew* である。同様に、自然主義についても、従来からの考え方をとり入れながらも、普通考えられているよりは、自然主義小説がそれほど皮相なものでもなく、たんに理論を形成させるためのものでないと考えている。自分の定義を具体的に例証するためいくつかの小説を論じ、とりわけ次の三小説に焦点をあわせている。Frank Norris の *McTeague*, Theodore Dreiser の *Sister Carrie* および Stephen Crane の *The Red Badge of Courage* である。

これら6作品のリストは James の *What Maisie Knew* をのぞけば、ごく常識的なリストであり、何ら目新しいものではない。しかし、自然主義小説には、その主題と形式、実生活の経験の解釈と作品の中で客観的に創造された経験との間に二つの緊張があり、19世紀後期のアメリカ自然主義小説家のもっていた第一の目的は時代・社会の支配的な力と個人の価値とが混りあっている生活の姿を表わすことであつたと断定している点は注目しなう。この断定を下すため、Pizer は Howells の *The Rise of Silas Lapham*, Crane の *Maggie: A Girl of the Streets* それに Frank Norris の *The Octopus* に興味ある分析を加えている。

さて、著者の主張をもう少し詳しく検討したい。収録されている章は次の13章である：

1. Late Nineteenth-Century American Realism
2. Late Nineteenth-Century American Natural-

ism

3. Frank Norris's Definition of Naturalism
4. The Evolutionary Foundation of W. D. Howells's *Criticism and Fiction*
5. Evolution and Criticism: Thomas Sergeant Perry
6. Evolutionary Criticism and the Defense of Howellsian Realism
7. Evolutionary Ideas in Late Nineteenth-Century English and American Literary Criticism
8. Hamlin Garland and Stephen Crane: The Naturalist as Romantic Individualist
9. The Significance of Frank Norris's Literary Criticism
10. The Ethical Unity of *The Rise of Silas Lapham*
11. The Garland-Crane Relationship
12. Stephen Crane's *Maggie* and American Naturalism
13. Synthetic Criticism and Frank Norris's *The Octopus*.

最初の9章はさきにあげた著者の二つの問題への解答の章であり、後の4章は個々の作品をとり扱ってはいるが、間接的に著者の二つの問題への解答を立証するものである。

Pizer は George J. Becker が "Realism; An Essay in Definition" (*Modern Language Quarterly*, X (June 1949)) であげた1870年以降のヨーロッパおよびアメリカの現実主義小説の定義の三つの規範から検討をはじめている。Becker によれば、観察と傍証から得た詳細な真実らしさ、経験というものの基準に近づこうとする努力、すなわち、小説のプロット、背景、人物を特異なものにするのではなく、代表的なものにもとめようとする努力、および、人間性や人間のする経験の主観的あるいは観念的な観点からではなく、むしろ人間性や人間のする経験を描く際に小説ができるかぎり客観的であろうとする態度が現実主義小説の三つの規範である。

ところが、さきにあげた *The Rise of Silas Lapham*, *Adventures of Huckleberry Finn*, *What Maisie Knew* に代表される1870年代、80年代、90年代のアメリカ現実主義小説の分析から、Pizer は二つの点で Becker とは違った結論を得ている。第一は、主題において非常に多様性がみとめられることであ

り、第二は、そこに描かれている人間性や人間のする経験は本質的には主観的なものでありまた観念的(すなわち、倫理的に観念的)なものであって、Becker の主張するところとは大いに相違が認められるのである。Howells の場合は Becker の規範にかなり合致しているようではあるが、現実主義小説の典型というよりは、中庸のものであり、Mark Twain はどちらかといえば特殊な出来事に大いに関心をよせているし、James は特殊な人物を描いている。彼らは日常陳腐な事件や人物という Becker の考えとはかなり違ったものを使っている。この傾向はこれら三人の小説家だけにみられるものではなく、多くの主要な小説家にみられる傾向であり、そこに19世紀の終り頃のアメリカ現実主義小説が将来さらに発展する力を秘めているのであると Pizer は主張する。

Silas の世界は19世紀後期のボストンの普通の社会ではあるが、Pizer によれば、実業界でのなが年の生活が Silas の道徳意識をかなり萎縮させはしたが、危機の瞬間に、特定の行為が悪となるのであって、Silas は正しい選択を行なう道徳的な力を得ている。自分の財産を救う機会を拒否することによって、Silas は道徳的に盲目であった自分の過去から脱するのみではなく、自分を取りまく社会からも脱するのである。自分の世界である実業界よりは明らかに道徳的には上に Silas は生きるのである。Howells のこの信念は本質的には観念的なものであり、そこには必ずしも現実をありのままに写すという態度のみがあるのではない。

*Huck Finn* の全篇には個々の出来事や人物を描写する際に、非常に詳細に真実らしく描こうとされているところがある。そして、これがかえって特殊なものが描かれていながら代表的なものが描かれているという感じを読者に与えているのである。

*What Maisie Knew* の場合も、James が序文で言っているように、作者の関心は物語よりも少女の知性を通しての屈折反射にあったわけで、どこにでもいる「粗野な少年」を主人公にしたのでは物語に真実らしさが生れないから、まれにしかみない少女を主人公にしているのである。そして、少女のもっている道徳的直観力とそれに反射された皮肉さから、その時代の代表的なものによるよりもより一層の真実らしさが認められるのである。

このような観点から19世紀後期のアメリカ現実主義小説を考察すると、現実主義小説の特質として従来か

らあげられている真実らしさ、経験の規準、客観性というものに加えて、倫理的理想主義と経験の諸様相という面をもその特質として重視しなければならないのである。

アメリカ自然主義に関しても Pizer は従来からの考え方に疑問をなげかける。従来の考え方は二つに大別できる。自然主義文学は現実主義文学の後に現われ、現実主義文学と同じ方向をめざしたものであるから、自然主義文学は現実主義文学の「延長」とか現実主義文学を継承したものであるとする見方と、もう一つは、現実主義文学と自然主義文学との相違からみる見方である。主な相違は自然主義文学者たちの哲学態度、すなわち厭世的決定論に顕著に現われているとする考え方である。

確かに、現実主義文学や哲学的決定論から自然主義文学の手がかりを得る方法は歴史的には証明できるし、またその目的も果してきたのではあるが、一つの文学のたどった運命を全体として考察する場合や、個々の文学作品を検討するときには、必ずしもこれは妥当性をもつものではない。たとえば、浪漫主義的傾向のある官能を多くもったものもあるし、決定論の「絶対」とは一致しない道徳的なあいまいさがとり扱われている作品もある。

そこで Pizer は Norris の *McTeague*、Dreiser の *Sister Carrie*、Crane の *The Red Badge of Courage* を考察して、アメリカ自然主義小説には二つの「緊張」があって、それらが主題と形式とを形成していることを論証している。第一の「緊張」は、自然主義小説の主題とそれから生まれる人間についての概念の間の「緊張」である。自然主義小説家たちは作品を中産下層階級や下層階級に設定することが多く、人物たちは貧困な生活をしていたり、無教育であったり、人づれがしていないことが多い。したがって小説の世界は、われわれが日常生活で感ずるものと同様平凡なものである。しかし、自然主義文学者たちはこのような世界の中に、性的冒険や肉体的な力を示したり、絶望的な瞬間や荒々しい死として現われる暴力や激情的行為、壮烈な冒険的な行為と結びつく人間の性質を発見しているのである。Carrie の経験や Henry Fleming の経験は正にこれである。

もう一つの点は、自然主義小説家たちは人物を描写するときに、それらの人物が環境、遺伝、本能、偶然といったようなもので条件づけられたり支配されているかのように描写することが多いと従来は考えられて

いた。しかし、見落してはならないのは、自然主義小説家が描く人物やその運命の中に個人とか個人の生の意味を肯定するものを暗示していることである。自然主義小説には、19世紀後期の世界で発見された新しいが不快な真実を描写しようとする小説家の態度と人間の行為の妥当性を確証したいという小説家の望みとの間の「緊張」が現われているのである。

たとえば、*McTeague* の場合がこれである。*McTeague* と *Trina* は偶然連れ添うこととなり、人間の自制心をこえたところにある本能に支配されたのであるが、Norris はそこに、いまだ描かれたことのない人間性のディレンマを性を通して描こうとしているのである。

このように19世紀後期のアメリカ現実主義小説や自然主義小説は単なる物質力による個人の破壊の客観的な説明でもなければ、日常ありふれたものの断片でも、日常普通の経験の詳細な描写でもない。Mark Twain, James にはじまり、Norris, Crane, Dreiser に至りさらにその度が深まったこれら小説家の描く人生は異常なものであり、また感動的なものである。Hawthorne や Melville と Faulkner の間の単なる間隙ではなく、現代アメリカ小説の特質とされている人間性の気高さと人間性の墮落の間の交錯の方向に近づいているものなのである。

19世紀後期の文学批評をみれば、現実主義小説と自然主義小説の特質としてあげたこれらのことが更に明瞭になる。もともと批評は小説よりもより観念的なものであり、理屈つばいものであるから、批評が現実主義小説と同じような傾向をより明瞭に示しているのは当然である。当時の批評には現実主義を擁護しようとするさまざまな革新的な考えがみられるし、また、Garland や Crane の浪漫主義的な個人主義を引きつぐものもあるし、Norris の主観主義も認められる。ここにも小説にみられる外面的現実と内面的現実——没個人的な素朴な決定論と個人的な想像力にたいする信念——との並存がみられるのである。

この点で特に興味深いのは第5章、第6章、第7章の三つの章である。批評家としてはそれほど知られていない Thomas Sergeant Perry が時代に限定された批評ではあったけれども、現実主義文学を辨護したり、1880年代では革新的な観点から社会の力の重要性や比較研究の意義を早くも洞察していたことが述べられている。

更に、Howells の現実主義を論じている章では、

Howells が19世紀後期のアメリカ 現実主義の主唱者であった点を、Darwin の影響と Garland や George Pellew の Howells 擁護から明らかにしようとしている。Howells の批評に Darwin の影響をみとめることは決して新しい見方ではないが、Garland や Pellew とともに Howells を論じ、その批評の重要性を明らかにしようとする点は新しい見方であると言わねばならない。

そしてこれらの革新的な批評の影響を論じた後で、William Morton Payne を引きあいに出して、革新的な文学論を論ずる際には、今後、文化人類学、社会学、言語学等多方面からの研究の必要性を1900年に説いた Payne の次の言葉を引用している：

The study of literature in the evolutionary sense tends more and more to become a comparative study. Just as the geological series of deposits, confused or abruptly broken off in one country, may be found continued elsewhere, so some line of development among the *genres* of literature, clear up to a certain point in the product of one nation, may from that point on be better traced by transferring the scrutiny to some other field. ("American Literary Criticism

and the Doctrine of Evolution," *International Monthly*, II [August, 1900])

本書に展開された著者の見解は、19世紀後期に出版されたアメリカ文学作品は、一見してうかがえるような単純なものでは決してないということである。19世紀後期のアメリカ文学作品はまだ多くのものが論じられていないし、もし論じられていても、それは単に一般論を導き出すためにされたにすぎないのである。著者が言うように、一つの時代の生んだ、まじめな試みから生み出された主題と形式の複雑な様式の価値と芸術における経験を明らかにするために新しい概念をうちたてなければならない。そのためには歪められた意味をもたされていた作品を再検討する必要がある。

なお、本書の著者 Donald Pizer は現在 Tulane University の Newcomb College の英文学教授である。1955年に U. C. L. A. より Ph.D. を受け、すでに、Norris, Crane, Howells, Garland などについて多くの論文を発表しており、1960年には *Hamlin Garland's Early Work and Career* を出版し、1963年には *The Literary Criticism of Frank Norris* を編集出版した、将来を囑望されているものである。

(同志社大学文学部助教授)